

2. 山田町を取り巻く周辺の動向

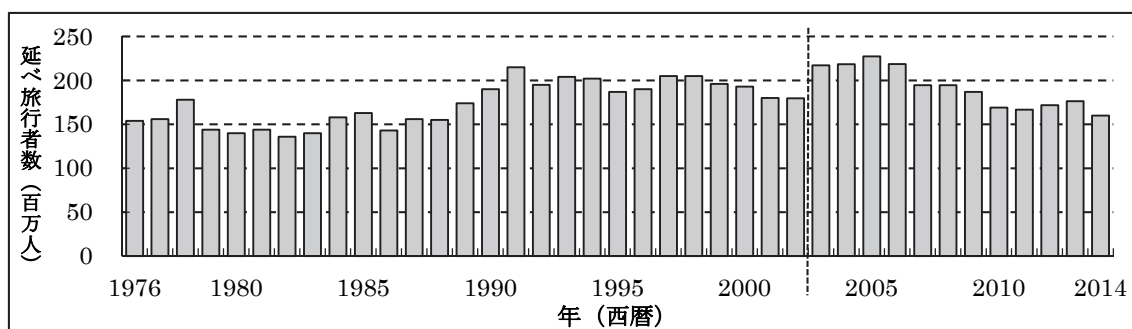
2-1. 社会経済環境の変化と国民の観光レクリエーション旅行の動向

(1) 国内観光市場の動向

① 日本人の国内観光市場

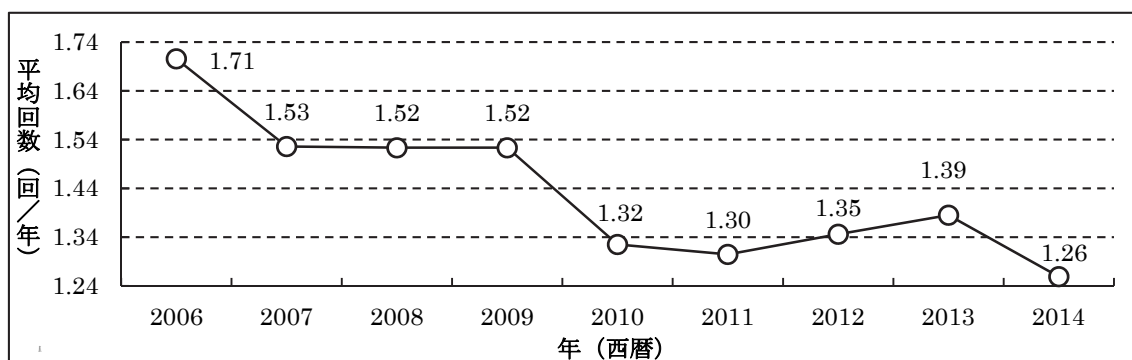
わが国の延べ国内宿泊旅行者総数は、2億9,734万人回であり、うち、観光・レクリエーション目的の国内観光宿泊旅行者数は1億6,003万人回である(図2-1)。日本人一人当たりの旅行平均回数は1.26回/年である。日本人の国内観光市場規模は、総じて縮小傾向にある(図2-2)。

図2-1 日本人の国内宿泊観光・レクリエーションにおける延べ旅行者数の推移



資料：国土交通省「全国旅行動態調査」(国土交通省編「観光レクリエーションの実態」)、観光庁「旅行・観光消費動向調査」を基に(公財)日本交通公社が推計・作図²

図2-2 日本人1人あたりの国内宿泊観光・レクリエーション旅行平均回数の推移



資料：各年の観光庁『旅行・観光消費動向調査』より作成³

² 2003年より算出方法が変更されたため、それ以前との比較不可。

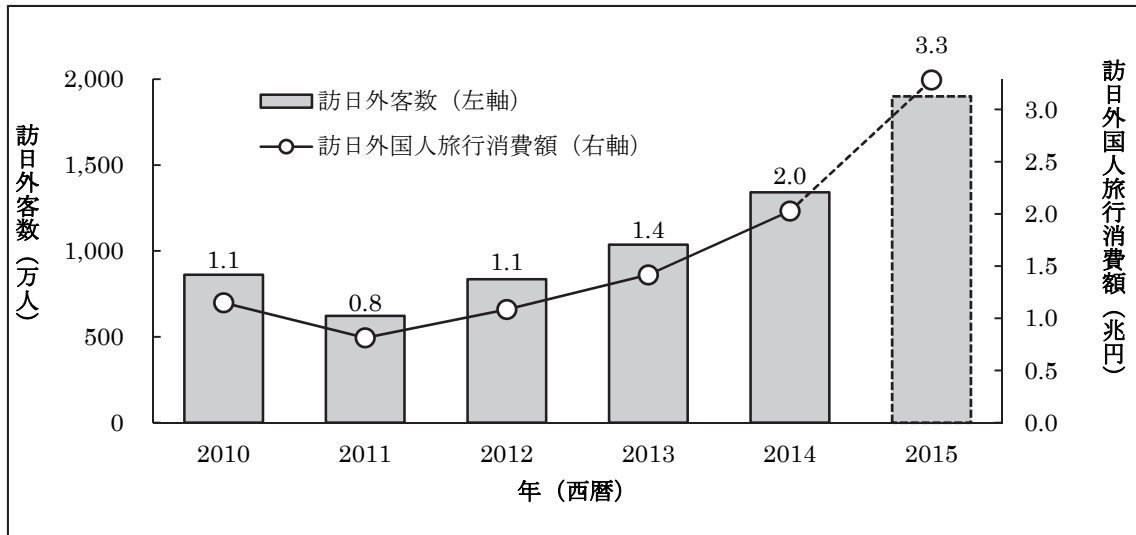
³ 2010年より調査対象者数を7,500人から25,000人に拡大。

② 訪日外国人市場の動向

訪日外国人旅行市場は拡大傾向である。特に近年は急増しており、2015年は過去最高の1,973万7千人を記録した(前年比47.1%増)(図2-3)。訪日外国人旅行消費額は2015年に3兆円を超えると推計される。

地方観光地への旅行は、「ぜひ」「機会があれば」旅行したい割合は約9割である(図2-4)。初訪日客が拡大しつつ、リピーターが増加しており、訪日回数が増えるにつれて、地方への訪問意向が高い傾向がある(図2-5)。

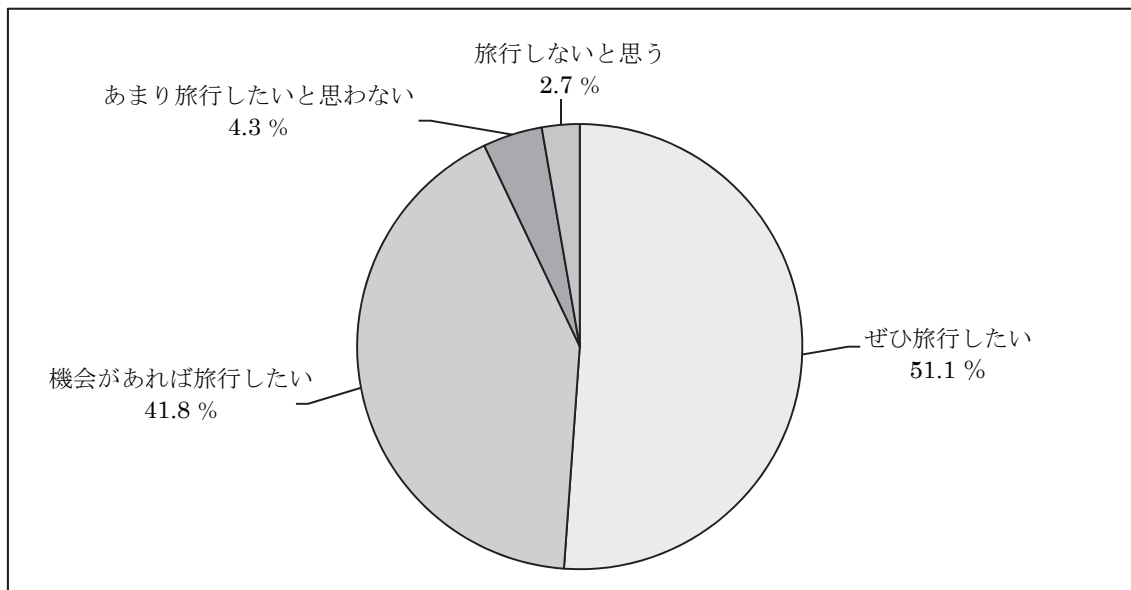
図2-3 訪日外客数と旅行消費額の推移



資料：：観光庁「訪日外国人消費動向調査」、(独法)国際観光振興機構「訪日外客数」より
(公財)日本交通公社が推計・作図⁴

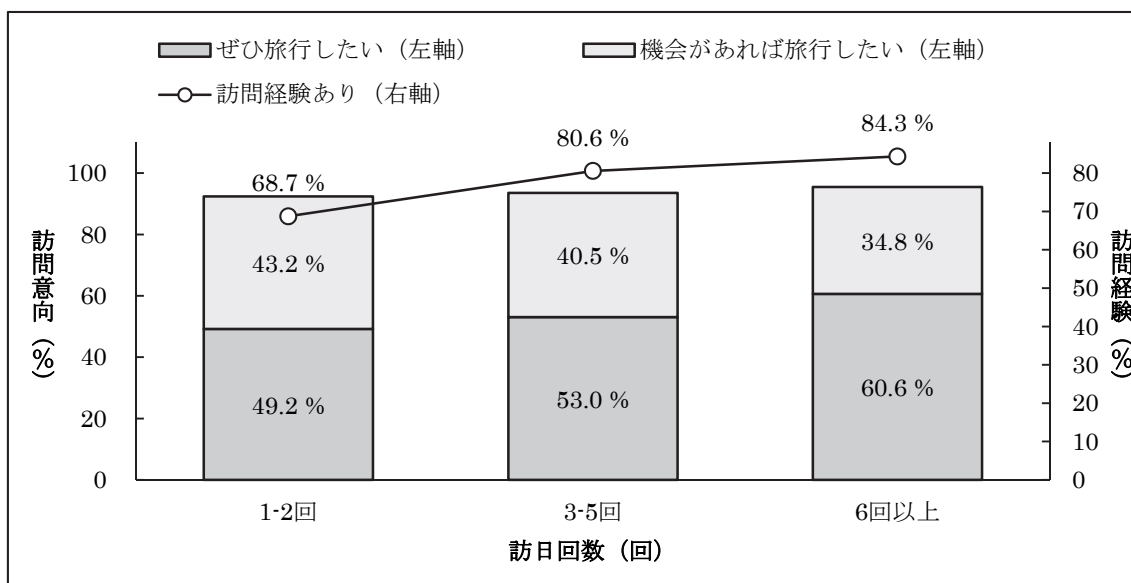
⁴ 2015年の旅行消費額は10-12月期の1人当たり旅行支出が前年並みで、訪日外客数が1,900万人と仮定した場合の推計値。

図 2-4 地方観光地⁵への訪問意向



資料：(公財) 日本交通公社、(株) 日本政策投資銀行
「DBJ・JTBF アジア 8 地域・訪日外国人旅行者の意向調査 (平成 27 年版)」

図 2-5 地方観光地訪問経験・意向(訪日回数別)



資料：(公財) 日本交通公社、(株) 日本政策投資銀行
「DBJ・JTBF アジア 8 地域・訪日外国人旅行者の意向調査 (平成 27 年版)」

⁵ 「地方観光地」とは「首都圏・都市部から離れた地域」として質問している。

(2) わが国の社会経済環境の潮流

現在、わが国の社会経済環境において、これまでの基本的な枠組みや価値観が大きく変化しつつあり、山田町の観光のあり方に密接な影響を及ぼす潮流は、以下のように整理される。

図 2-6 社会潮流の変化と観光レクリエーション旅行の動向

社会潮流の変化と観光レクリエーション旅行の動向	
社会潮流の変化	<p>社会の潮流</p> <p>ア. 高齢化・少子化—高齢者の旅行・観光に対するニーズの増大や質的变化 ／家族旅行（余暇活動）の活発化 →●高齢者旅行への対応／家族旅行への対応</p> <p>イ. 国際化—欧米のライフスタイル、価値観の浸透による地域選別基準、サービス水準の高まり （→日本の歴史文化への回帰も）／アジア諸国の経済成長による新たな観光市場の出現 →●地域資源の発掘／国際観光への対応</p> <p>ウ. 情報化—ITの発達により、インターネットを通じて、様々な情報をリアルタイムに送受信 →●ITを活用した情報提供方法の検討</p>
	<p>価値観</p> <p>ア. 自然環境や農山漁村への関心の高まり—癒し、安らぎ志向 ／アウトドアライフ、グリーンツーリズムへの興味が増大 →●山間部、漁村部の資源の有効活用</p> <p>イ. 本物志向・健康志向の高まり—「生活の質」への希求は本物志向へ ／食生活の多様化は、本物志向、高齢社会・健康への関心を背景に、“安全な食材・食品”を追求 →●地域の食（材）の有効活用</p> <p>ウ. 学習・創造的活動への関心の高まり—生活の力点の変化（物から心の豊かさへ）／自由時間の増大により、生きがい、自己実現を図るための余暇活動への関心が増大（例：ボランティア活動など） →●体験プログラム・メニューの開発</p>
	<p>まちづくり支援</p> <p>・全国各地で多様なNPO法人が発足（例：自然環境保全、下線の流域からの水質改善、産業支援、環境やまちづくりを素材とした学習型プログラムの実施に取り組むNPOなど） →●多様な主体の巻き込み</p>
	<p>交流</p> <p>・今後一層広域的な地域間において、人、物、情報の交流が活発に展開されていくことが予想される →●広域連携／地域の魅力アップ</p>
国民の観光レクリエーション旅行の動向	<p>ア. 高まる余暇活動へのニーズと多様化 ・余暇活動は、価値観やライフスタイルの多様化を反映して、同じように多様化 活動の選択肢が豊富になっているため、国内旅行・観光の相対的な比重は低下しつつある →●魅力的な旅行やメニュー・プログラムの提案</p>
	<p>イ. 国内観光旅行の大きな変化 ・団体旅行が減少し、家族や友人・知人などによる小グループ旅行が増加／自家用車の比率が高くなり、駐車場の確保、交通渋滞等が問題に（一方では交通弱者への対策も問題に） →●小グループへの対応強化／自家用車への対応</p>
	<p>ウ. 国内の観光地間競争の激化 ・国内旅行は、高速交通網の整備、農山漁村での観光交流拠点施設などが整備され、観光目的値の選択範囲が広がり、分散化 →●地域資源の発掘（個性的で魅力ある地域づくり）</p>
	<p>エ. まちなか観光（まち歩き）の進展 ・地方中小都市の市街地（まちなか）が持つ“生活文化”を楽しむ、身近な旅が人気 →●まちなか観光（まち歩き）への対応</p>
	<p>オ. 体験型観光の進展 ・これまでの「観る」ことを中心とした観光から、「体験する」観光への注目が高まっている →●体験型観光への対応</p>

2-2. 北東北地域の観光の現状と課題

(1) 北東北の観光資源

(公財)日本交通公社の「観光資源の“今日的”価値基準の研究(2013年度～2014年度)」を基に、北東北の観光資源の評価を概観する。

本調査では、観光動向および観光行動の変化や2020年の東京オリンピックの開催も見据え、A級以上の観光資源について、「美しき日本とは」「日本の魅力の原点とは」といった観光を考える上での根源的な問いかけに立ち返り、観光資源評価委員会において、全国の数多くの観光資源を評価・選定している(表2-1)。

この調査に基づき、A級以上の北東北の観光資源(自然資源、人文資源)の分布を図2-7に示した。

表 2-1 観光資源の評価基準

ランク	基準・内容	代表資源名
特A級	わが国を代表する資源で、かつ世界にも誇示しうるもの。わが国のイメージ構成の基調となりうるもの。	富士山 摩周湖 法隆寺 姫路城 祇園祭 他
A級	特A級に準じ、その誘致力は全国的で、観光重点地域の原動力として重要な役割を持つもの。	芦ノ湖 天橋立 清水寺 高山の街並み 他
B級	地方スケールの誘致力を持ち、地方のイメージ構成の基調となりうるもの。	筑波山 浜名湖 高山の朝市 他
C級	主として、県民および周辺地域住民の観光利用に供するもの。	身延山 石神井池 広島城跡 他
以下D級一	地域住民の利用。	

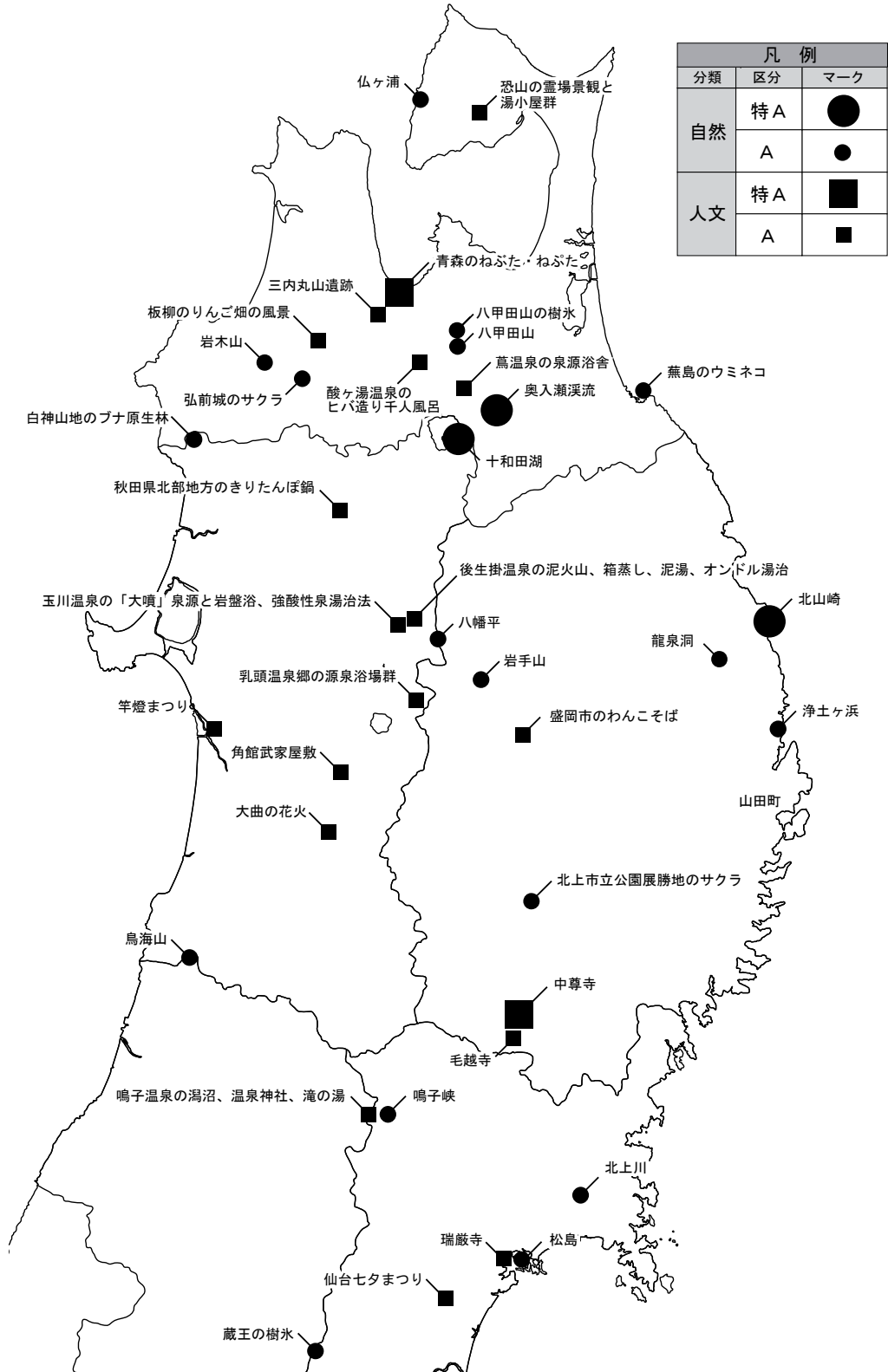
資料：(公財)日本交通公社「観光資源の“今日的”価値基準の研究(2013年度～2014年度)」

自然資源の分布を見ると、八甲田山・十和田湖周辺や陸中海岸北部、岩手山・八幡平周辺等に資源の集積が見られる。また世界遺産にも登録された白神山地を有する。

北東北は、海、山、川（溪谷）、森、花、温泉（火山景観）等多種多様な資源を有し、「北国の豊かな自然」という意味において南東北とは一線を画す。北海道とは競合するものの、北海道の“おおらかな、大陸的な自然”に対して、北東北の“きめ細かな自然”はより日本（人）的なものとして特徴づけられる。

人文資源は自然資源と比較すると質・量ともに多少見劣りする観は否めないが、時代時代の栄華を反映した歴史的な資源が各地に点在している。縄文時代の三内丸山遺跡や、中世の資源としては中尊寺をはじめ平泉に魅力の高い資源の集積が見られる。近世の資源には弘前城等が挙げられる。

図 2-7 A 級以上の観光資源の分布



資料：(公財) 日本交通公社の「観光資源の“今日的” 価値基準の研究 (2013 年度～2014 年度)」を
 基に、国土地理院 50 万分の 1 地形図を使用して作成

(2) 北東北の宿泊施設

図 2-8 は、北東北において一般観光客の利用に対応し得る宿泊施設の収容力の分布を示したものである。

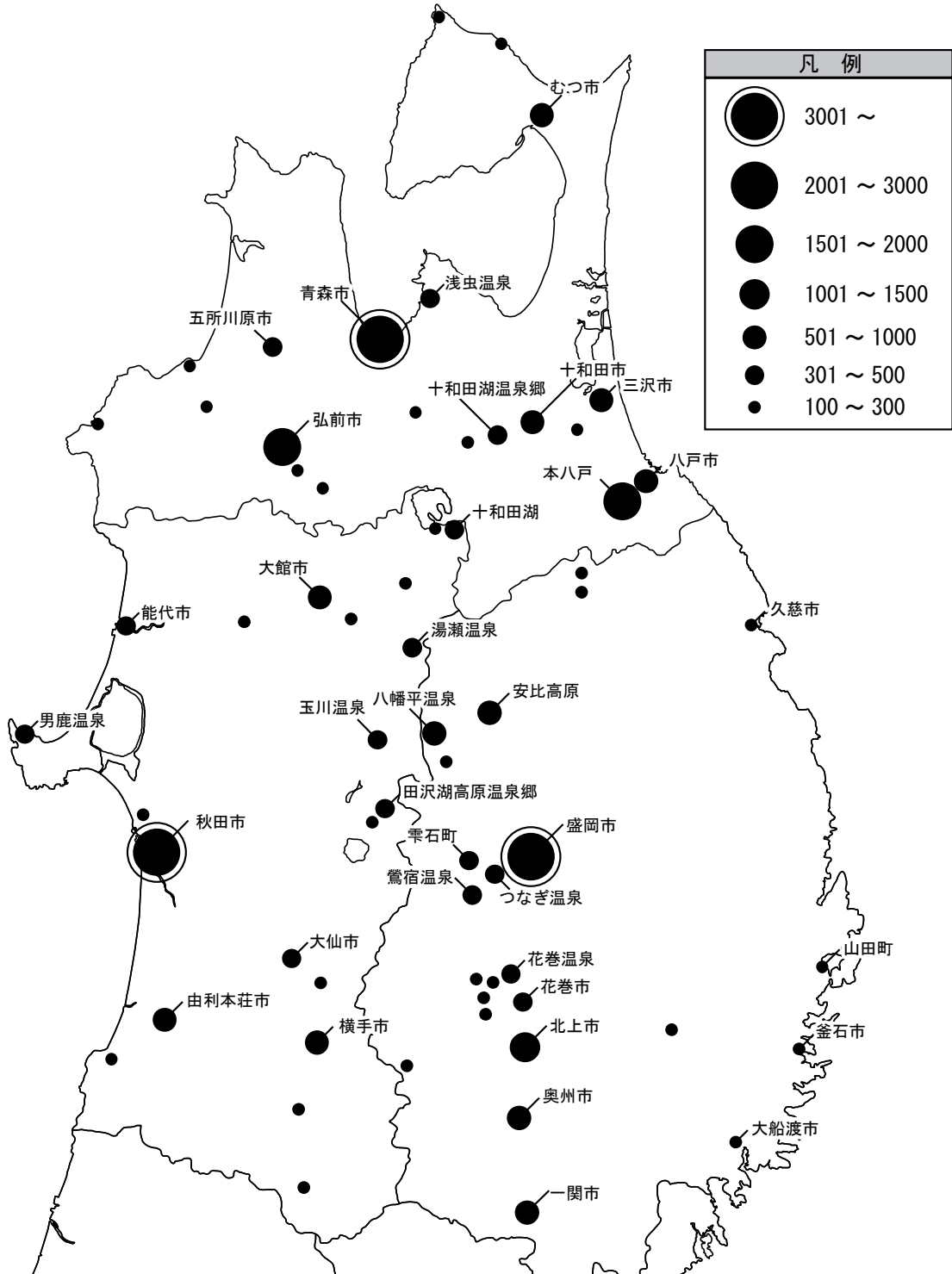
北東北全体で見ると、東北縦貫自動車道をはじめとする高速道路沿線に一定規模以上の宿泊収容力を持つ地区の多くが分布しているといえる。

また、個別の地区で見た場合、北東北において相当規模の宿泊収容力を有し、ひいては観光周遊ルート上の宿泊拠点にも位置付けられている地区は、

- ・ 青森、秋田、盛岡等の県庁所在都市
- ・ 浅虫、古牧、男鹿、花巻等の温泉観光地
- ・ 十和田湖畔等全国有数の資源を持つ観光地
- ・ 田沢湖高原や八幡平、安比等の観光的魅力に恵まれ、温泉をも有する山岳・高原レクリエーション地

等が挙げられる。

図 2-8 宿泊施設の収容力の分布(室数)



資料：旅行出版社の「全国版宿泊表 2015 年春・夏号」を基に
 国土地理院 50 万分の 1 地形図を使用して作成⁶

⁶山田町の宿泊施設データは掲載無のため作図時に追加。

